
パラレル ほむら もうひとりの自分

窪まり

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

パラレル ほむら もうひとりの自分

【Nコード】

N9695Y

【作者名】

窪まり

【あらすじ】

パラレルワールドを行き渡る暁美ほむらの物語。さまざまな政治体制・文化・そして異なる時間軸を一ヶ月ごとに体験する。「パラレル少女・暁美ほむらちゃん」のリメイク。続編。

深夜の太陽 もう一人の自分（前書き）

もう一人の自分に、もう一度、出会う。

今度こそ、もう一人の私を救ってみせる。

昭和の雰囲気が残存している近代化が遅れた見滝原市での物語のはじまり。

深夜の太陽 もう一人の自分

パラレルワールドを渡り歩く魔法少女・暁美ほむらの物語。

「パラレル少女・暁美ほむらちゃん」のリメイク・続編。

魔獣との戦いとき、時空の歪みが生じた。時間遡航の魔法を使う暁美ほむらは、あらゆるパラレルワールドを行き渡る。

- - - - -

巴マミ・佐倉杏子・暁美ほむらは、今夜も魔獣との戦いをしていた。見滝原市の某駅のホームで、強い閃光があつた。

杏子「なんなの！この太陽のような強い光。まるで昼間の太陽みたい。閃光が眩しい！！」

マミ「わたしは長年、魔獣との戦いをしているのに、こんな体験は初めてだわ！」

ほむら「なにか、私を引っ張る力が働く。閃光に吸い込まれる！」

マミと杏子は駅のホームにある柱に必死でつかまつた。猛風が突き抜けた。「閃光に向かって風が吹いてきた！魔獣の新たな戦略？」魔法少女ではマミは、最もベテランであったが、このような状態での戦いは初めてだった。マミの風で帽子が取れて、閃光の中に吸い込まれた。

身体を食いしばって、暁美ほむらは閃光に向けて弓矢を引いた。

駅のホームの、あらゆるゴミなどが閃光の中に吸い込まれていく。まるで深夜の太陽に、あらゆるものが掃除機に吸い込まれる。

『ゴー!』という音という風の音が鳴り響いていた。

まるで地上にブラックホールが出現したかのようなのである。

閃光に向かって上斜め方向に重力を感じる。

まるで、空にも地面があるような錯覚を感じた。

そのとき暁美ほむらは、弓矢の矢を発射すると、身体が浮き上がり、閃光の中へと吸い込まれてしまった。

マミ「暁美さんー!」と叫んだが、ほむらからの返事がなかった。

杏子「くそー! さやかだけではなく、ほむらまでも円環の理に行ってしまった!」

マミ「魔獣の新たな戦略? でも魔獣までもいなくなったわ」

マミは魔獣までも閃光に吸い込むものは、なんなのか理解できなかった。

駅のホームは、真っ暗になった。そこには暁美ほむらの姿はない。

マミと佐倉杏子の二人の魔法少女の姿しかない。

- - - - -

気がついた時、夕方、昭和時代の面影を残した街の公園にいた。魔法少女の服装のままの暁美ほむらが立っていた。

その時、ロングスカートのセーラー服の少女たちがいた。

数名の女子中学生が、一人の少女をかこみ公衆男子トイレの中へと連れて行かれようとした。

顔を見た時、三つ編みの髪型をした暁美ほむらと同じ顔をした少女である。

「やめて！助けて！」と必死に叫んでいた。

気を取り戻し、暁美ほむらは、数名で取り囲む少女たちの一人の肩をつかんで顔を殴った。

「何なの！本気で殴ることないでしょう！私たちに言いかかりを付けるき！」と怒鳴った。

「わたしは、弱いものいじめが嫌いなだけ」とクールな口調で答えた。

魔法少女の姿のまま乱闘した。少女たち数名が一斉に、暁美ほむらに襲いかかるが、まるで武道の達人のように振る舞う暁美ほむらがあった。その乱闘で、何人かの少女たちは軽い怪我をして去って行った。

「大丈夫？」暁美ほむらは優しい口調で、もう一人の私の暁美ほむらに訪ねた。

「私は大丈夫です。ありがとう。私の名前は暁美ほむらです。」と弱々しい声で答えた。

暁美ほむらは愕然とした。

また、同じ世界に行ってしまったこと。

さまざまなパラレルワールドに行く運命になるのを悟った。

深夜の太陽 もう一人の自分（後書き）

短く、ちよくちよく連載させていただきました。

今度は、もう一人の私を殺させない

再び、もとのパラレルワールドに来てしまった暁美ほむらは、パラレルワールドに住む、もう一人の暁美ほむらを元気つけたいが、むしろ、元気つけて欲しいのは、暁美ほむら自身である。

『再び元のパラレルワールドに来てしまった。さっきの輝くブラックホールのようなものが、この世界へ送り込む時空の裂け目なんだわ。もう一人の私を慰めるよりも、私を慰めて欲しい。今回はQBがない』

もう一人の暁美ほむらは、その場から離れようとしたとき、暁美ほむらは「もう少し、話をしたい」と言った。しばらく街の公園にいないと、今度は『もう一人の無力な私が』不良少年たちに襲われるからである。

暁美ほむらは、次に起こることを知っていた。

翌朝、彼女が殺されることも知っていた。今度は、もう一人の暁美ほむらを殺させない。不良少年たちに襲わせない。暁美ほむらは、そう考えた。

もう一人の暁美ほむらは、髪の毛が少し短く三つ編みをして、太い額縁の眼鏡をつけていた。野暮ったいと思えるロングスカートのセ

ーラー服を着ており、スカート丈は靴の直前まで達していた。全体が濃紺のセーラー服を着ていた。

ほむら「ここで、しばらく話をしたいわ。実はあたしの名前も暁美ほむらだから」

もう一人の暁美ほむら「私と同じ顔をしている。あなたはどこから来たの」

ほむらは、答えるのに戸惑ったが「遠い街からきた」と答えた。

ほむら「この街は、かなり荒れているね」

もう一人のほむら「日本中が荒れているのを知らないの。どこに行っても同じようだよ。何十年にわたる不況で、みんな希望を失っているから、わたしみたいな鈍臭い人間を、いじめることで、日頃の鬱憤を、晴らしているのだよ。さっき助けてくれて、ありがとう」

二人とも公園のベンチに座り、少しでも長く話し合おうとした。

もう一人の暁美ほむらは、暁美ほむらのストレートで長い髪の毛を見ていった。

「あなた、なぜ、こんなに長い髪の毛しているの。そんなに長いと学校で注意されないの。でも、きれいだよ」

ほむらは、深夜の街を徘徊する不良少年たちに襲われないようにす

るために少しでも長く話し合い、翌朝、私服姿の女子中学生に殺されないようにするために、もう一人の暁美ほむらのアパートに泊まるうとして、少しでも話を弾ませようとした。

ほむら「でも、さつきは危なかったわね」

もう一人のほむら「私は、鈍臭いから、いつもクラスメートに虐められるの。学校の先生に相談しても、無駄。だって先生も生徒から傷害事件の被害者になることが良くあるの」

暁美ほむらは、少しでも話を長くさせるために、もう一人の暁美ほむらの話を聞きき、時間を稼ごうとした。公園の時計が午後9時になったら、もうひとりの暁美ほむらのアパートに行こうと考えた。

もう一人の暁美ほむらは、肩までの長さの三つ編みであり、校則が厳しいわりには、荒れていることと想った。そして、暁美ほむらがいた世界の、近代改装した見滝原中学校の自由な雰囲気、そして、みんなが仲良くなっている平和な学園生活とは全然違う事を知った。

もう一人の暁美ほむら「でも、あなたの服装、すごくモダンでかっこいいわ。でも、こんな派手な服装をすると警察管に声かけられるのではないの。中学生なんだし」

ほむらは、ちよつとした嘘をついた。「実は私、帰国子女で、まだ日本のことをよく知らないから」

もう一人の暁美ほむらは「なるほど」とうなづいた。

もう一人の暁美ほむらは、訪ねた「では両親はどこにいて、なぜ、この街に来たの？それに何で、そんなに喧嘩が強いのか？」

暁美ほむらは、他の世界から来たことを言っても信じてもらえない。そう深く追求されても困るのである。「それは……。私、実は親と喧嘩して、家出したの。だから今日は泊まる場所がない」と答えた。

もう一人のほむら「じゃあ、喧嘩が強いのは？」

ほむら「武道を習っていたから」

もう一人の暁美ほむらは「なるほど」と答えて、ほむらは安心した。

公園の時計は、午後9時を指していた。

ほむら『この時間なら、もう一人の私が住むアパートへの行く道には、あの不良少年たちはいない』と考え、もう一人の私が住むアパートへ二人で行った。

もう一人の暁美ほむらの悲惨な生活（前書き）

パラレルワールドの見滝原市は、1970年代のオイルショックから立ち直れないため近代化改装されていない。何十年も続く不況のため人々の心は荒んできている。退院後、市立見滝原女子中学校に転校した、もう一人の暁美ほむらは、転校初日からイジメ抜かれた。

もう一人の暁美ほむらの悲惨な生活

午後9時 暁美ほむらと、もう一人の暁美ほむらは、公園を出て、もう一人の暁美ほむらのアパートに向かった。

遠くにあるコンビニには、5人くらいの不良少年たちがたむろしていた。

車高が低い、違法改造車だと思える平べったい車が3台くらい停まっていた。

見滝原市では意外と自動車が多く、ピカピカな高級車とボロボロになった軽自動車のどちらかしか走っていない。貧富の差の激しさを感じた。

70年代から走り続けていると思える360ccの軽自動車が故障しレッカー車に引かれるところを見た。そして、段ボールの家が延々と続く見滝原市であった。

日本が戦争に勝ったパラレルワールドでは、ホームレスの姿は滅多に見ることはなかったが、この世界の見滝原市には、多くのホームレスが存在している。

もとの世界の見滝原市とは違って近代改装されていないため昭和時代の雰囲気が残存している。

もう一人の暁美ほむら「今の日本のままだと、いづれ外国に吸収合併される」と言った。

「何十年も続く不況のため、今の日本はメチャクチャなの」

ほむら「そうなの」

もう一人のほむら「あなたは外国から来たから、まだ日本のことを知らないと思うけど、電車がものすごく混んでいなかった？ たまに古い茶色い電車も走るし。この街を走る電車も一時間に2本か3本で本数が少ないから、すごく込んでいるの。遠い街から来たから疲れていない？」

ほむら「ちょっと、疲れたわ」と適当に答えた。

ほむらは、再び悲惨な状態な見滝原市に戻ってしまった女神・鹿目まどかに怒りを感じた。

『なぜ、再び、こんな世界に戻らなければいけないの！』

無意識に、曉美ほむらは、もう一人の曉美ほむらのアパートへ向かって歩いて行った。

もう一人のほむらは「あなた、まるで私のアパートの場所を知っているように歩いているね」

ほむら「そうかな。この街、初めてなんだけど」

もう一人の暁美ほむらは不思議に思った。

もう一人の暁美ほむらのアパートに到着した。

彼女が住んでいるアパートは、トイレが共用であり、お風呂はない。いかにも1970年代のアパートそのものだった。

もう一人の暁美ほむらはポケットから鍵を出し、自分の部屋のドアを開けた。

部屋の中は何もない。殺風景な部屋だった。4畳半であり、ちょっとした台所があるだけであった。

テレビがなく、小さなポケットラジオしかなかった。当然、携帯電話もパソコンもない。

もう一人の暁美ほむらは、インスタントラーメンを作り、二人で食べた。

二人が食べ終わった時、もう一人の暁美ほむらは自分の境遇を語った。

「わたしは、転校した初日から、いじめの対象になったわ。転校生だから、モノを投げつけられるし、先生が注意しても、みんな騒ぐだけだし、それに、先生が叱ると、逆キレするありさまだし。」

もう一人の暁美ほむらも、しばらく心臓の病気で病院に入院し、見滝原女子中学校に転校した。

そして、転校生紹介のときでも、クラスでは、みんながワイワイ騒ぐし、輪ゴムをわたしのほうに向けて弾いたり、紙クズを投げつけられる。そして休み時間には、取り囲んで、悪口を言われる。

体操の時間、準備体操だけで貧血で倒れたら、横腹を蹴られる。体操の先生が注意したら、その横腹を蹴った女子生徒が逆キレして、体操の先生は何も言えなくなる。

それにしばらく入院していたから、学校の勉強が良くわからない。だからバカあつかいする。

もう一人の暁美ほむらは「わたし精神的にもう限界！もう一度入院したいわ」と泣いた。

ほむらは、なんと言っていていいか解らず黙っていた。

明日の朝、もう一人の暁美ほむらが殺されるかも知れないと思って、ほむらの表情は険しくなった。

『もう一人の私を絶対に殺させない』

もう一人の私が殺される前に（前書き）

翌朝、もう一人の暁美ほむらが殺されようとしている。

携帯電話を使った「学校裏サイト」で言いがかりをつけられた女子中学生に襲われる前に、暁美ほむらは、もう一人の自分を守るうとしました。

もう一人の私が殺される前に

暁美ほむらは、明日の朝、もう一人の暁美ほむらが殺されることを知っていた。

以前、パラレルワールドの時間軸の世界では、もう一人の暁美ほむらが私服の女子中学生にカッターで首筋を切られ、出血大量によって死亡した。

あまりにも衝撃的な事件であった。

今度は、絶対に『もう一人の暁美ほむら』を殺させないと心に誓った。

その夜、二人の暁美ほむらは、パジャマに着替えて寝た。

その翌朝の6時に、もう一人の暁美ほむらよりも早く起き、魔法少女の時と同じ服装をした。

午前7時15分、目覚まし時計の音で、もう一人の暁美ほむらが目を覚ました。

「おはよう。あれ、早いね」と、もう一人の暁美ほむらが挨拶した。

その時、暁美ほむらは険しい表情をしてた。

もう一人の暁美ほむらは、ロングスカートのセーラー服に着替え、学校に行く準備をした。

午前7時45分　これから、もう一人の暁美ほむらがドアのノブに手をかけた時、暁美ほむらは、大きな声で叫んだ。

「ドアの近くに、あんたがいることを知っているわ。話があるなら、この部屋に入ってきたなさい」と叫んだ。

「シーン」とした雰囲気があり、もう一度、ほむらは叫んだ「もう一度言う。黙っていないで、話し合いたいなら、この部屋に入りなさい！」と言った。

もう一人の暁美ほむらは、ほむらの奇行に思えて唖然とした。

外には人の気配が全くしない。暁美ほむらは、慎重にドアのノブを動かし、ドアを静にあけた。

アパートの廊下には、誰もいなかった。

不思議に思った、暁美ほむらは、もう一人の暁美ほむらと一緒に学校までついて行くこうとした。

アパートから出た時、階段の下に私服姿の女子中学生が倒れていたのを見かけた。

彼女のポケットの中に大型カッターナイフがあった。

ほむらは訪ねた「この子、知っている？」

もう一人のほむらは「たしか隣のクラスの女子だね。何故、私のアパートの近くで倒れているの？」不思議に思った。

ほむら「あなたに殺意をもっている子がいるわ。十分注意した方がいいわ」と言った。

何故、自分のアパートの方角を知っており、隣のクラスメイトが自分に殺意を抱いていることを知っているのか不思議に思う、もう一人の暁美ほむらがいた。

濡れ衣・もう一人の暁美ほむらのブログ

暁美ほむらは、もう一人の暁美ほむらを殺害しようとした女子中学生の携帯電話をいじった。

もう一人のほむら「人の携帯電話を勝手に使ってはいけないよ！」と注意したが、

ほむらは「これを見て、これはあなたの名前で書かれたブログなのよ」

もう一人のほむらは時間を忘れて自分名義のブログの内容を見て愕然とした「なんなのこれ！わたしこんなこと思っているも、口が裂けても言えない！ひどい濡れ衣だわ！」

ほむら「そう。これがあなたに殺意を持った原因なの」とクールな言い方をした。

だが、ほむらはなぜ、もう一人の暁美ほむらに殺意をもった女子中学生が、アパートの前で倒れているのか理解できなかった。

「とにかく、こんな物騒なものはどこかにしまった方が良いわ」と大型カッターを取り上げた。

気がつく前に、携帯電話で暁美ほむら名義のブログを書いた人を捜し出そうとした。

そして倒れた女子中学生のポケットに携帯電話を戻し、そのままにした。

で、暁美ほむらは考えた末に、もう一人の暁美ほむらと入れ替わろうとした。

「わたしが、しばらくあなたの代わりに見滝原女子中学校に通うことにするわ。同じ顔をしているし、私が犯人を断定するから」と提案し、もう一人の暁美ほむらも、ひどいイジメで精神的に参っているから、その考えに二つ返事で賛成した。

この時間軸の世界に来た時の暁美ほむらは、髪の毛には赤いリボンをしており、魔法少女の時に着ている衣装であった。

長い髪の毛をバッサリ切り、三つ編みにして野暮ったいロングスカートのセーラー服を着て、赤茶色の額縁が太い眼鏡をしたら、もう

一人の暁美ほむらとは区別できない。もうひとりのほむらは、「まるで鏡を見ているみたい。わたしこんな姿をしていたのね」と感心した。

「感心している場合じゃない！あんたのためだからね」と暁美ほむらは言い、もう一人の暁美ほむらは、見滝原女子中学校の道順を教えた。

見滝原女子中学校は、もとの世界では、同じ住所（位置）にあった。

たしかに昭和時代の雰囲気が残存しており、校舎はボロボロだった。至る所に落書きが書いている。窓ガラスが割れたままの教室もあった。女子中学生なのに昼間から学校でタバコを吸っている女子生徒もいた。文字通り、ロングスカートにチリチリ頭をした女子中学生スケバンもいる。

校舎にはいると、何とも言えない独特の臭いがしており、教師もガラが悪いが、どんなに酷いことをしても生徒を絶対に殴れないし、注意することもできない。いかにも体育会系の男子教師とばかりであったが、何も言わずに通り過ぎた。学校が完全に荒廃しているの

を感じ取った。

教室のドアを開けて「先生、遅れてすみません。」と暁美ほむらは、かつて鈍臭い頃の記憶をたどって、弱々しく言った。早乙女先生は無言だった。いかにも、どうにでもなれという雰囲気だった。

まだ暑さがわずかながら残っており、ある女子生徒はロングスカートを引き上げて、太ももをあらわにして、太もものところに下敷きで風を送った。女子中学校だから授業中でもパンツが丸見えでも平気なのである。

教室の至るところに落書きがあり、そして男性タレントの写真が至る所に貼っている。なかには上半身裸の男性アイドルの写真が貼っていた。

授業中なのに、教室の中は雑談が多くあり、暁美ほむらに向かって輪ゴムが飛んできた。

ほむらに対して、罵倒する声が聞こえるが、早乙女先生は、ただ黙々と授業を進めていった。

『これでは、あの子、いやもう一人の私が精神的に参るはずだわ。魔女や魔獣の戦いよりも厳しいかも……。』と呆れた。

なぜか、いじめっこがしばらく来ない教室

数学の時間、男性教師は「今日は、いやに欠席が多いな」と言った。

それは、もう一人の暁美ほむらを頻繁にいじめていた生徒たちである。数学の時間でもあいかわらず、皆が授業を聞かない。雑談が多く、暁美ほむらに向けて、ゴミを投げつけるが、暁美ほむらは見事に受け取った。「おもしろい。鈍臭い暁美がこんなに運動神経が良いとは思わなかった」と一部の生徒が叫ぶが、数学の教師は、全然無視して授業だけを進め、黒板に数式を書くだけである。

暁美ほむらからみると、小学生5年の算数のレベルだった。こんなに授業が簡単になったことに驚きを感じた。

そして昼休み直前、担任の早乙女先生が、いかにも重大な事件があるような顔をしながら言った「昨日、このクラスの数名のクラスメートが障害事件で大怪我しました。当分の間、学校に来られません」と言ったが、ざわざわ雑談を言っているので、暁美ほむらには、やっと聞こえる状態である。

だから、比較的に関性が大人しい子だけが、学校に通い、今日、欠席したクラスメートは、暁美ほむらを頻繁にいじめる生徒たちであった。

学校の帰りにコンビニで新聞を買うと、見滝原市で女子生徒たちが、次から次へと傷害事件の被害者になったと言うことを知り、なぜ、

もうひとりの暁美ほむらを虐めるクラスメイトだけが襲われたのが謎だった。

暁美ほむらは考えた。『私は、いずれ、また、この世界に来るかも知れない』

第三の暁美ほむら？

学校から帰るとき、野暮ったいロングスカートのセーラー服が異様に重く感じる。

ほむらは、はじめて女子校に通ったけど、少し緊張して疲れたのもあるが、動きにくい野暮ったいセーラー服が異様なほど重く感じるし動きにくいのである。

この世界に住む、もうひとりの暁美ほむらのアパートの郵便受けを見ると、茶封筒があり、その中には小銭がたくさん入っていた。約2000円ちよつとのお金が入っていた。みな昭和時代の貨幣だった。

100円玉とか50円、10円玉ばかりだった。

その時、暁美ほむらは確信した。もう一度、この世界に行くことになることを。

たしかに食費は助かる。

今朝は、もう一人の暁美ほむらを殺しに来た女子中学生が私服のままアパートに倒れていること、そして、頻繁に、もう一人の暁美ほむらを虐めていた女子中学生のグループが皆、何者かによって倒されていることなど、どう考えても、この世界から出たとき、いつか再び、この世界に戻り、なんらかの方法で、生活をしなければならぬと考えた。

「この世界には、3人の私がいる」と考えた。

「3人目の私は今、どこにいるの？」

見滝原市の魔法少女はどこにいるの？

もう一人の暁美ほむらがいる世界の市立見滝原女子中学校には、どこを探しても鹿目まどかや巴マミの姿が見あたらない。彼女たちは公立学校は荒んでいいるから、どこか別の街の私立中学校に通っていると思った。

この世界で知っている人間で、毎日出会うのは、美樹さやかだけである。なんとか気を遣いながら、みんなと合わせて学校生活をしている。当然、志築仁美というお金持ちのお嬢さまが荒んだ公立学校に行くわけがない。佐倉杏子においては、魔法少女になったのかわか不明である。佐倉杏子の父親が管理する隣町の大きな教会が廃墟になっていない。

この世界において（魔法少女としての）人間関係はバラバラなのである。

どこかに、3人目の私がいるはず。3人目の私を捜すために、暁美ほむらは学校を休んだ。

頼りになるQBもない。どこかに3人目の私がいるはずだと思い、暁美ほむらが、この世界に着た時の公園に、3人目の私を捜したが、どこにもいない。「まさか魔法少女が浮浪者みたいに、その日暮らするわけない」と暁美ほむらはつぶやいた。

また魔獣の姿がほとんど見当たらない世界であるから、自分だけが特別な存在だと思った。

午後3時から、もとの世界でよく使った見滝原市の某駅に、鹿目まどかなど、知り合いを捜した。

「もしかしたら鹿目さんが、この世界の魔法少女なのかもしれない」と三つ編みの髪型に野暮ったいセーラー服を着たまま、赤茶色の眼鏡をかけ駅前で自分の知り合いがでてくるのを待った。鹿目まどかが午後4時に駅の改札口からでてきた。そして、この世界の鹿目まどかに声をかけた。「すいません。ちょっと訪ねたいことが・・・」と言ったとき、暁美ほむらは何を話して良いのか、一瞬、頭の中が真っ白になった。

鹿目まどかは、ジャケットの制服を着ていた。スカートの丈は膝くらいまでであった。小さいネクタイをした少しモダンな学生服を着ている。暁美ほむらが着ているセーラー服と比較すれば野暮ったさがない。鹿目まどかは、知らない人から声をかけられ緊張している。

「鹿目家は、どこにありますか？」と質問したら
「それ、私の家ですが。もしかしてママの知り合い？いつもお世話になってます」と礼儀よく挨拶した。

暁美ほむらは、鹿目まどかの後ろをついて行った。

「うちのママは、仕事で忙しくって、帰りがいつも遅いの。で、パパは珍しく専業主夫をやっている」と徐々に、自分の家の話をした。鹿目まどかの家に着いたとき、もとの世界の家とは違い、いかにも昭和時代に作られた小さい家だった。町並みも昭和を思わせる雰囲気だった。鹿目まどかの家の近くに、小さい黒いネコがいた。

まどか「私、エイミーという黒いネコ飼っているの」

「家が狭くってごめんなさい」まどかは、ほむらに親しく話しかけた。

「で、ママに何のようがあるの？」まどかは、お茶をほむらに出し質問した。

ほむらは困ったように何言っているのか迷い「それは・・・」

ほむらは話しをそらし、「魔法少女の噂しらない？」

鹿目まどかは、「なんなの？アニメ、それともオカルトの話し？」と不思議そうな顔して答えた。ほむらは『たぶん鹿目さんも、魔法少女ではない。いったい3人目の私はどこにいるの？』そのとき、珍しく早く家に帰って来た鹿目旬子が帰って来た。

ほむら『不味い。どうしよう・・・』と困った。

まどかの名刺を渡されて

今日は珍しく、まどかの母親、鹿目旬子が帰って来た。

まどか「おかえりなさい。ママ。いまお客さんが来ているの」

旬子「お友達？」

まどか「それがママにようがある子なの」

その時、暁美ほむらは逃げ出したかったが、逃げ出せる状態ではなかった。

まどか「この子、知っているよね」

旬子「あの、もしかしたら一昨日、会った子では……。何で髪の毛を切ったの？」

ほむら「髪の毛が長すぎたから、先生に注意されて」

旬子「そうなの。この子、遠い親戚の家に行くから道を尋ねれて」

そのとき暁美ほむらは、旬子の話を聞いて、

ほむら「このあいだは、ありがとございます」と丁寧にあいさつした。

旬子「ゆっくりしてらっしゃい。もう遅いから夕食でも食べたら」

ほむら「いいえ、おかまえなく」

旬子「遠慮しないで。確か中学二年生だね。まどかと同じ歳だし、良いお友達になれかもしれないわ」

まどかは「ちよっと、待っていてね」と自分の部屋に行き、

まどかは、プリクラで作った名刺を、ほむらに渡した。

まどか「友達の記念に」

ほむら「ありがとう」

そして、暁美ほむらは、まどかの父親が作った料理を食べて、もう一人の暁美ほむらが住むアパートへ帰った。

あらためて、鹿目まどかは性格が良いと思った。

「この世界のまどかには絶対に魔法少女にさせない」とつぶやき、もう一人の暁美ほむらのアパートへ向かった。

アパートに着いたとき、もう一人の暁美ほむらは、「今日はとても遅かったね。心配したわよ」

ほむら「実は友達ができて、その家によばれたの」

そして、まどかの名刺を、もう一人の暁美ほむらに見せた。

「この子と友達になったのだよ」

で、内心、曉美ほむらは、この世界の3人目の私は、いまどこにいるのか気になった。

3 人目の暁美ほむら（前書き）

新年もよろしくお願ひします。

しばらく、小説の連載が止まりました。

次はどうするか、自分でも解らず連載が止まりました。

拙い小説ですが、今後もよろしくお願ひします。

3人目の暁美ほむら

この世界の暁美ほむらは友達がいらない。友達がいらないことに慣れていたので、逆に言えば、勝手に友達を作ったことに迷惑に思った。

「わたし、友達は、あなただけで十分。なぜ、身も知らぬ人と友達になったの？」

暁美ほむらはクールな口調で「この世界には、私が3人になるわ。あなたと私と、どこにいるか知らない、もう一人の私。いつまでも、私がいるとは限らない。鹿目まどかという子は他の学校に通っているから、あなたに迷惑はかからない。きっと良い友達になるわよ」と言い。

「どうしたら良いの。私、解らない」と、もう一人のほむらは言った。

暁美ほむらは、三つ編みに結んだ髪の毛をほどきクールな口調で、もう一人の暁美ほむらに言った。

「明日から、あなたが通っている学校に行きなさい。しばらくいじめっ子も来ないから」

「学校に行きたくない」とわがままな気持ちを出したとき、「あなたのために、私は長い髪の毛をバッサリきったのよ」と言った。

暁美ほむらの何とも言えない威圧感を感じ、もう一人の暁美ほむらは、憂鬱な気持ちで布団を引いて寝た。

もう一人の暁美ほむらは、次の朝、学校に行く準備をした。そして、暁美ほむらは、第3の暁美ほむらを探しに、街の中を歩き出した。魔法少女の時の服装だと、目立つので、もう一人の暁美ほむらの私服を借りた。女の子としては、とても地味な服装だったが、目立たないから都合が良いのである。

一日中、探し回ったが、第三の私、暁美ほむらも、また魔中も魔女もいなかった。

第6の魔法少女 なおみ

暁美ほむらは、昭和時代の面影が残る見滝原市を歩き回った。

その時、警官から声をかけられた。「君、ちょっと」面倒な事になるので、瞬時に魔法少女に変身して、その場から逃げた。変身した暁美ほむらを見て警官は目を疑った。

補導され住所と名前を聞かれても、この世界では答えようがなかったからである。

暁美ほむらがいた見滝原市と、いまいる見滝原市は別の世界。パラレルワールドである。

1970年代から不況を克服できないままの日本のパラレルワールドである。

「この時間、中学生が頻繁に歩き回っていたら変に思う。大人らしい服装ができないかな」と思ったとき、いきなり話しかけた少女がいた。

「ほむら、なぜ長い髪の毛を切ったの？それに、とても野暮ったい服を着て、どうしたの？」と言われ、ほむらは「あなたは誰？」と返事した。

「冗談言わないで、ほむら」

暁美ほむらは、この世界の見滝原市で唯一の魔法少女だと思った。そして、第3の暁美ほむらのふりして、答えた。

「ちょっと気が変わったから髪を切ったの」

「へえ、そうなの」

そして、現在の暁美ほむらが解らないような話しを شدしたので、
適当にうなずいた。

第6の魔法少女なおみと一緒に歩くと、民家を改造した小さな教会
にたどり着いた。

「あたしたち、昼間は歩き回らない方がよいわ」

暁美ほむらは、一かバチかで質問した

「わたし別の世界から来た魔法少女なの。あなたは誰なの？」

「なに言っているの。あたし、なおみなの。忘れたの」

ほむらは率直に言った。

「あなたが一緒にいるのは、未来の私なの」

「?なんなの意味が解らない?ほむら、今日のあなたはおかしいわ。
だったらさっきの話しを適当にうなずいたのはどうゆう意味!」

「わたしは一度目に、この見滝原市にたどり着き、いずれこの世界
から離れる。そして再び戻るのが、あなたと一緒に、未来の私なの」

「良く意味が解らないけど、要するに、『さらに』別世界から来た、
暁美ほむらなのね。いつくものパラレルワールドがあることを知っ
ているわ」

第6の魔法少女なおみの理解は間違えている。

それで、曉美ほむらは、いずれ、他の世界に行き、再びこの世界に戻って来ることを理解した。

「なおみさん。あなたの歳は？」

「わたし19歳。現在、親に反抗期中です」と、ちょっと笑いながら答えた。

魔法少女になるにはギリギリの年齢である。

「では、夜のために今から寝るわ」と言って、狭い部屋に案内された。

いまは午前10時半である。

いずれ、ここに第三の曉美ほむらが来るのを予感した。

第6の魔法少女 狭い部屋に案内され

なおみが現在住んでいる家は、やや大きめで昭和30年代に建った民家を教会に改造した建物である。

なおみの父親は、隣のアパートに住んでいる。サラリーマンと牧師の仕事を両立している。

人数が少ない礼拝出席者数の教会を運営しているのであるが、なおみは中学・高校生のときに、教会内の悪い模範や、特に父親の悪いところに目が届くので、キリスト教精神に反発しているのである。

そして、ミッシヨン系の女子中学校に通ったときに、とても美しい先輩に憧れ、そして同性愛に目覚めた。それを知った牧師である父親は激怒した。

「お前には悪霊が取り憑いている」「いいか同性愛は、とても重い罪だぞ」とか言われ、それ以来、親と別居である。民家を改造した教会の狭い部屋（空きスペース）に引きこもってしまったのである。

同性愛が認められるようと、高校卒業の直前にQ.Bに願ったら、中学生のときの先輩も同性愛に目覚め、なおみとエッチなことをするようになった。先輩の部屋に入り浸りになったが、（魔女退治として）頻繁に夜出歩くので、不審に思ったら、魔法少女であることを知り、別れてしまった。だから、現在は孤立している。

で、両親が住んでいるアパートにも戻れない。日曜日しか使わない民家を改造した教会堂に月曜日から土曜日まで昼間だけ寝泊まりしているのである。

ほむらは「お金はどうしたの？」

なおみ「なぜ、あなたがそこまで詮索する権利があるの！まあ、た
まに性風俗店のアルバイトをちよつとだけしているから、お金に関
してだけなら私にはやましいこと無いけど」

ほむら「で、なぜ、もう一人の私と出会ったの？」

なおみ「それは言えないわあ。二人の秘密だーしい」と、ややギャ
ル言葉になっている。

なおみは、金髪の髪の毛をしており、その辺にいるギャルたちと同
じ恰好をしている。

部屋の広さは、二畳間ほどの狭さで、毛布が引いているので、なお
みは服を脱ぎ、ほむらの目の前で下着姿になって毛布に潜った。

ほむら「もう一人の私は、今どこにいるの？」

なおみ「あたしケータイを持っていないから知らない。お互いケー
タイがないから夕方まで連絡できない」と言い放った。

「じゃあ、あたし寝るわよ。これ以上話しかけないで」と言って、
そのままやすやす寝てしまった。

暁美ほむらは、夕方、第三の暁美ほむらが戻ってくるのを、教会に
改造された建物の中で待った。

畳二枚分だけの狭い部屋

魔法少女なおみは、一晩中、魔女を捜して退治し、グリーンフィールドを得て、自分のソウルジェムを浄化させている。お金が足りないとき、電車で1時間くらいのところにあるピアン系のお店に行き、女の子とエッチな事をしてお金を貯める。

第3の、暁美ほむらは、今日の夕方、必ず来ると思った。

なおみが住んでいる部屋は、畳が二枚分しかない狭い部屋で、元は雑用品を入れる部屋として使われていたが、なおみは、その中にあるものを片付け、毛布を二枚か三枚かけ、女の子が使う布団を一年中引いている。畳が二枚縦に並んでいる状態である。

幅が狭い。わずか畳二枚だけの部屋には、多くの下着や洋服、上着がゴツチャになっている。

午前11時、なおみは深夜の魔女退治で寝ている。夕方になれば、性風俗店に行き、そこで閉店までアルバイトして、その後、朝の9時か10時まで、魔女を捜し求めている。

暁美ほむらは、教会堂に改造された古い民家で、第3の暁美ほむら、すなわち未来の自分が来るのを、長い時間待っていた。

暁美ほむらも疲れた。周囲にあるのは聖書とか宗教書である。本をめくると、難しいことが書いている。夕方までの時間が永遠の長さを感じる。そして、暁美ほむらも睡魔に襲われ、礼拝堂の椅子に座って、寝てしまった。

午後3時、まだ3時間も時間がある。

夕日が強く差し込んだ礼拝堂は眩しいが、徐々に寒くなってくる。感覚遮断を使おうと思ったが、あまり魔法を使うと、自分のソウルジェムが濁るので、使わず寒さを耐えた。

あと1時間で、午後6時になる。その1時間はローカル線で電車を待つのは違った意味で辛い物がある。1分、1分が、長く感じる。その1時間が、最も長く感じる。

未来の私なら、もっと早い時間に来ても良いはずだわ。なぜ、第3の私は、私に姿を隠し続けるの？
そう考えると憤りを感じる。

午後6時、なおみが起きだし、これから、アルバイトの性風俗店に行くから、ほむらも出なさいと言われた。

教会の外に出された、暁美ほむらは、教会の入り口で寒さに耐えながら、第3の暁美ほむらが戻ってくるのを待ったが、午後7時半になっても来なかった。

あきらめて、暁美ほむらは、もう一人の暁美ほむらが住んでいる、アパートに戻った。

二人で銭湯へ

暁美ほむらは、もう一人の暁美ほむらのアパートに戻った。そして郵便受けには茶封筒に、5000円ほどのお金が入っていた。彼女たちにとっては大金だった。

封筒の中には、暁美ほむらと同じ筆跡で「ごめんなさい」というメモがある。

それ以外、何も書いていない。暁美ほむらは、せめて理由ぐらい書いてくれればいいのと思った。

そのとき、もう一人の暁美ほむらは、銭湯に行く準備をした。

もう一人の暁美ほむらは「タオルに石鹸、その他、洗面器も大丈夫」と持ち物を確認した。

「ごめんね。私一人分の持ち物が無くて」と、もう一人の暁美ほむらが言った。

暁美ほむらは「私に来お遣わなくても良いわ。ところで銭湯はどこにあるの?」

「歩いて20分くらいのところだわ」

もう一人の暁美ほむらは、三つ編みの髪の毛をほどくと、姿は、暁美ほむらと同じだった。

「まるで、双子みたい」と、もう一人の暁美ほむらは言った。

暁美ほむらは、初めて銭湯に行く。銭湯とはどんなところか、体験したことがないからである。

「ねえ、あなたに5000円も送る人がいるの。第3の私からだわ。だから、このお金を大事に使いなさい」と言いながら、二人は銭湯に向かった。

銭湯はいかにも昭和時代の建物だった。

ほむら達、二人は銭湯の入り口につくと、靴を入れ、裸足で歩き、二人分の料金を払い、脱衣所で服を脱いだ。

その時、暁美ほむらは驚いた。

もう一人の暁美ほむらの背中全体が、青あざだらけになっているのを。

二人は、全裸になった。暁美ほむらは「あんな。なぜ、そこまで痛めつけられたの」

「わたし、鈍臭いから、同じいじめっこのグループに呼び出されてお腹と背中を殴られたり蹴られたりしたの。ほぼ、毎日だから、もう慣れっこなの」

「そんな事に慣れる必要ないだろう！」と小さな声でつぶやいた、暁美ほむらがいた。

「そんなに、イジメ抜かれて良く耐えた」

「今日は、私があなたの背中を流してあげるわ」と、ほむらは泣きたい気持ちを抑えて言った。

「いいよ。そんなに気を遣わなくても」と、もう一人の暁美ほむらは言った。

「あなたが着替えるとき、スリップの下着姿しか見なかったから気がつかなかった」

ふたりは、タオルを交互に使いながら、自分の身体を洗った。

「わたし、やはりあなたの背中を洗うわ。遠慮しないで」と強く言い、もう一人の暁美ほむらの背中を洗った。

暁美ほむらは、もう一人の暁美ほむらが、魔法少女のほむらよりも辛い境遇に耐えているのを知って、彼女の背中を洗いながら、涙を流した。

そして、二人は湯船に入り、もう一人の暁美ほむらに話しかけた。

「いつも、陰惨なイジメに耐えて、あなたは、わたしよりも強いわ」

「そんなこと無いわ。私、とても鈍臭いから、皆から早く死ねだと言われて続けて」

その時、全裸で入って来た少女がいた。それは、第6の魔法少女なおみである。

「ねえ、あなたたちに重大な事を知らせに、私、この銭湯にきたの」

重大なこととは？鹿目まどかが死亡した！

もう一人の暁美ほむらが通っている銭湯に、突然、入って来た少女、（第6の魔法少女）なおみが、全裸で重大な事を告げようとした。

ふたりは、銭湯の湯船に入っている。そして、なおみは、二人に重大なニュースを言った。

「実は、もう一人の、あなたから聞かされたの。夕方、6時半に。駅の改札口に向かうとき、もう一人の、あなたがいて、そして、あたしこれから仕事があるのに、強引に喫茶店に連れ込まされたの。そして、もう一人の、あなたが重大なことを言ったの」

暁美ほむらたち、二人は真剣は表情で、なおみの話しを聞いた。

「実は、実はとても悲しい知らせだけど……。あなたが友達になった、鹿目まどかが事故で死んだの」

それを聞いた暁美ほむらは愕然とした。

「はじめ、あたしも信じられないと思ったけど、喫茶店のテレビのニュースが流されて、見滝原市の某駅前で自爆テロがあったの！下校途中の鹿目まどかが、それに巻き添えを食らって。その時、もう一人の、あなたが、以前から鹿目まどかの死亡を予告していたの」

なぜ、それを知りながら第3の私である、暁美ほむらが自爆テロを魔法少女として防げなかったのか理解できなかった。

「それ、ほんとうなの」と、話しを確認した。

「ほんとうのことだわ」と、なおみは答えた。

暁美ほむらは、悲しくなった。”この世界の”鹿目まどかが不慮の事故で亡くなったことを。そして、気がついた時には涙をながしていた。

もう一人の暁美ほむらは「それ冗談でしょ？」と言ったら、キツイ口調で、なおみは「そんなこと言うために、わざわざこんなところに来るわけないでしょう！」と大きな声で叫んだ。他のお客が、なおみのところに振り返った。

暁美ほむらたち二人は、すぐ銭湯の湯船から出て、服を着て、この世界の鹿目まどかと出会った駅前に向かった。

駅前には、まだパトカーがいて警官達が事件の検視をしていた。何人も人が自爆テロで亡くなったことを理解した。なおみも後からついてきた。

なおみは言った「あの自爆テロは外国の新興宗教のテロだと思うが、もし、あたしがテロの実行犯なら、走行中の電車の中で自爆するわ。どうして、駅の改札口で自爆したのか謎だわ」とつぶやいた。

気がついたら、二人は湯冷めした。身体が冷えてきた。

「あなたは自分の部屋に戻って。わたしたち二人で、事件の様子を確認するわ」と、もう一人の暁美ほむらを一人でアパートに帰らせ

た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9695y/>

パラレル ほむら もうひとりの自分

2012年1月14日08時47分発行